



鎮守の森だより

NPO 法人 社叢学会ニュース

第 23 号

2006 年 9 月 11 日

鎮守の森で かがり火のもと

『向日明神篝狂言』を開催



かがり火のもと、石舞台上で演じられた狂言

京都市の南に接する向日市は、長岡京の大極殿跡があるなど歴史の町であり、向日神社を中心に西国街道の要地として栄え、市民であることが誇りであった。昭和 23 年に地方自治法が施行され、地域のことをお上におまかせしたことから町への関心が薄れ、誇りとなる行事や名所もなくなり町は輝きを失い、市民から誇りが消えた。そして、住民自治のシンボルであり、祭には近郷近在から見物客を集めていた向日神社も、手入れされなくなり荒廃していた。

2003 年秋、向日神社の社叢を整備し、そこにふさわしい行事をつくることで誇りを取り戻そうと「鎮守の森の会」を結成、5 千本の竹や雑木

を伐採し、4.5 ヘクタールの鎮守の森は 8 割がた整備を終えた。本殿の裏は山桜と紅葉の神苑で、戦前には土俵があり、市民の集う場所であった。手入れされなくなったことから竹や雑木が茂り、市民も近寄らなくなっていた。元の姿に戻そうと整備し、狂言を催せる舞台を造った。

狂言は室町時代、自由を求める農民のバイタリティを糧として生まれ、社寺の境内などで催され、酒を飲み、やんや、やんやと声をかける観客に合わせて演じていたもので、自治を育ててきた神社にふさわしい芸能であり、住民自治を育むべき神社にふさわしい芸能だと思った。

この思いから生まれたのが、8 月 23 日に開催した『向日明神篝狂言』であり、この思いに賛同し、酒を飲みながら観られる狂言会を引き受けていただいたのが、茂山千之丞さんである。ここに至るまでには社叢学会の佐々木高明、上田篤、(故)米山俊直など諸先生がたの導きがあり、また、園田稔先生が 22、23 の両日、15 名の学生を連れて手伝いに来ていただくなど、当日は東京や大阪・京都などから集まった 70 人のボランティアで運営された。400 人の観客を集めての『向日明神篝狂言』まずまずのスタートを切った。「鎮守の森からまちづくり」をキャッチフレーズに、私たちのまちづくりは 4 年目を迎える。

鎮守の森の会の世話人 / 上田昌弘

神輿塚の話

～近江甲賀の事例から～

講師 米田 實(滋賀県甲賀市市史編纂係長)
コメンター 井上 満郎(京都産業大学教授・社叢学会理事)

塚の定義 塚は人工で造られたマウンドであるが、正確な定義はむづかしい。『国史大辞典』によると、「土を盛りあげて人工的に造った丘。これには死者の墓所もしくは祭りの場とされるものと、記念物であるものなどがある。古墳なども塚と称されることがあるが、こうしたものとは別に境界や祭りの場にある塚も多く、さまざまな名称で呼ばれている。いずれもその由来を語る説話を付随しているものが多い。それらの説話は必ずしも真実を伝えているとは限らないが、その塚にどのような感覚をもって人々が臨んでいたかを示している。」と記している。このように考古学上の発掘調査をしても、何かわからないようなものが塚で、そこに民俗学的なはたらく場所がある。

塚への関心 民俗学では柳田國男が明治40年代から大正にかけて、かなり集中して関心を寄せたことがあった。「十三塚」(明治43年)、「塚と森の話」(明治45年)、「十三塚の分布及び其伝説」(大正2年)、「民俗学上における塚の価値」(大正7年)などはその代表的なものである。例えば、「十三塚」については「常に残るものを含めても全国に120例余りある。その塚の由来や分布を詳らかにすべき・・・」と云っている。柳田の関心は塚の定義や解明よりも森や壇、樹木などとともに、日本人の考える神霊の祭祀場の一つとしてとらえ、民間信仰史研究の資料として位置づけるところにその眼目があった。

一方、考古学の立場からは、全国的な古墳・古墓の発掘調査の増加のなかで、塚は中世遺跡の一つとして把握され、歴史考古学の俎上におかれた。考古学者大場磐雄は「歴史時代における“塚”の考古学的考察」(昭和46年)で「考古学者からも民俗学者からも継子扱いされてきたこの遺跡が、実は私達常民の祖先が残した貴い遺跡であることに注目を傾け、あたたかい手をさしのべて、国の文化財の保護下に置かれんことを切望する」と記している。その成果として、「塚」を有形民俗文化財としてとらえなおそうとする動きが出た。昭和54年には東京都の豊島長崎の富士塚、江古田の富士塚が国指定重要有形民俗文化財に指定され、以後、埼玉県川口市の木曾呂の富士塚、兵庫

県山南町の金屋の十三塚、奈良県生駒市平群町の生駒十三峠の十三塚などが文化財指定となり、岩手県黒石市の黒石の十三塚、岩手県北上市を含む南部領伊達領堺塚が国指定史跡となっている。しかし、文化財としての塚は一定の進展をみたが、塚の本質は何かという議論が深まったかとなると、相変わらず継子扱いされているのが現状である。

多様な「塚」と名称 塚には古墳としての塚、墳墓としての塚、宗教的な塚(経塚・供養塚・十三塚など)、記念としての塚(鈴鹿峠と蟹塚伝説など)、標識としての塚(一里塚・傍示塚・五ツ塚など)がある。滋賀県内で古墳として認識されている遺跡の数は1160件ある。この内、塚古墳と呼ばれるものが242件、山古墳と称するものが212件、森古墳と称するものが8件、その他はそれぞれの地名や社寺名などを冠したものとなっている。これらの古墳の名称をみると、大塚が非常に多く、丸山・円山・高塚・茶臼・罐子・車・瓢箪・塚・王塚・甲・神輿(御輿)・塚越・大將軍・將軍・稻荷・狐・馬・亀・牛・行者などがあり、これらの名称から古墳は身近な存在であったといえる。

神輿塚の伝承と古墳

滋賀県甲賀市水口町泉に古墳時代中期の野洲川中流域を代表する大型古墳「泉塚越古墳」があり、副葬された武具・武器に特色があり、大和王権と密接な関係をもつ軍事色の強い古墳である。この古墳には油日神社の神輿が埋まっているので、掘ると祟りがあるという伝承があり、地元では神輿塚とも呼ばれ、近世の「延宝五年泉村絵図」には「輿塚(こしづか)」の名で記録が残っている。油日神社は三重県との県境近く甲賀市甲賀町油日に鎮座し、中世には油日大明神、近世後半期には川枯神社という式内社名で呼ばれた甲賀地域を代表する神社である。地元の伝承では、油日神社の神輿がここまでお渡りになって、その神輿が動かなくなったのでここに埋められたという。また、この神輿はさらに野洲川沿いに下り、湖南市の甲西町から石部町にわたる範囲まで渡御し、その帰り道にトラブルがあり、帰れなくなって埋められたのがこの塚越あたりであるという伝承もある。

日本庭園の特質に関する研究

「美し国」の景観づくりに指針

講 師：進士 五十八（東京農業大学教授）
コメンター：坂本 新太郎（大阪芸術大学教授）

問題の所在

わが国の造園学は、能楽や林学の一分科として発祥したが、造園学研究の草創期で個別名園に歴史的研究方法でアプローチするのが一般化しすぎて、“造園の計画設計施工技術への展開”という技術史的視点が等閑視されがちになっていた。造園学は文字通りランド（土地・自然）・スケープ（全体・総合）・アーキテクチャー（構築・創造）を目指す技術・学術・芸術であるという観点を再確認する。

（１）「造園」の本質へ接近

日本の自然風土のもとで 2000 年にわたり育まれた自然共生・循環型の環境デザイン 「農」のデザイン / 百姓のデザイン、つまり「用」本位の「農」を基盤に、CIVIC BEAUTY 感覚が加わり、やがて美に先鋭化し、「景」本位の「日本庭園」に発展した「空間と景観」の技術 / 用と景の調和技術としての「日本の庭園」分析し、その特質と本質を解明できれば、日本文化の本質を世界に伝えることが可能になり、他方でこれからの「美し国・日本」の景観づくりに指針を与えることができる。

「日本庭園」は世界的に広がっており、世界中に日本庭園 400 余ヶ所ある。庭園の発生は古代神中国園林・仏教によって日本に入り、日本化し代表的日本文化となる。

本質への接近方法として、庭園史研究には 空間史 生活史 農業史 多面性の 4 つの観点が指摘できる。また、造園学研究の方法として 現象論的アプローチ 構造論的アプローチ 機能論的アプローチ 象徴論的アプローチの 4 つのアプローチがある。

（２）「日本庭園」の成立と本質

研究を通して得られた本質についての結論を整理してみると、次のような指摘ができる。

庭や園は、立地・構成・地割において「生きられる環境、景観」の基本型である。

庭園は、「社会の縮図」。政治・経済・社会・教育・文化・信仰・芸能・技術・文明などの反映であり、その総合化の結果である。

植栽工、土工、水工、石工などの造園技術の基本は、農業技術の発展形である。

日本の自然風土と日本人の自然観・風景観が

「日本固有の空間文化・景観文化としての日本庭園」を完成させた。

人間と自然の共生、空間と時間の合一化など、「日本庭園の技とところ」には 21 世紀地球社会が必要とする環境哲学を内包している。

調和のとれた美しい大自然（山水）を縮景したものが日本庭園であり、庭園を「拡景」すれば理想環境づくりが可能となる。理想国家、理想都市を念願するもそれを実現できない人々が、せめて創出可能な「にわ空間」レベルで具体化したのが「庭園」。従ってこれらを拡大すれば、作庭術は理想的なまちづくり、むらづくり術に発展できることになる。

以上の日本庭園の本質に関する 6 点の指摘のほかに、その成立と展開過程について以下の 5 つの視点を指摘することができる。

原型・古代日本人の神観念：アニミズム、石（磐境）・木（神籬）・水（瑞垣）などを含みこんだ農耕技術を基盤とした百姓の環境デザイン＝ルール・ランドスケープ・デザイン（用水・溜池・屋敷林など）

造庭への発展・職能の発生：石立僧（夢窓）、仏教思想、景と境で秩序あるミクロコスモス構想力、山水河原者、川原居住で自然環境と景観の観察、環境土木力など

時代的要請・形式から様式へ：宴遊 曲水・平城京宮跡庭園など、市中の山居 露地・茶庭（今日庵・不審庵）など、農本主義 井田法・茶畑・梅林（岡山後楽園）など、多目的環境計画 軍事・外交・宴遊・殖産・スポーツ・レクリエーション（旧浜離宮庭園）など

造園の思想：環境 立地場所に相応の安全・安心・共生循環空間を構築、景観 憧景・名所の再現（桂離宮）、自然学習性による造景（月の桂の庭）など

技術の特質：自然技術（自然のデザイン、生物多様性のエコロジー）

社会技術（コミュニティ、自然美と歴史的興味の保全、人と自然のコミュニケーション）

空間技術（用と景の調和 1 人間の行動を支えるオープンスペース）

景観技術（用と景の調和 2 ディスアメンティの除去、シビックビューティの創出、敷地と外部景観を結ぶランドスケープ）

(3) 日本庭園の特質

これまでの研究成果を整理すると、自然観、風景観、技法・手法上の特質の上から4つの原理に集約できる。「縮景」「借景」「樹藝」「然び」である。

縮景：空間(圍繞)縮尺表現技術により理想追求精神を具現。理想境、憧れ、仏教思想、須弥山蓬莱、山水、名所、景勝地などを庭園サイズに縮尺しつつ再構成する技術を縮景という。

借景：景観、眺望技術による環境共生型開発精神。外界との関係をつけ庭園の閉塞性を打破する。外部との連続感により遠くの自然を取り込む。注連縄や鳥居などを主景に配することで、象徴的な意味をつなく。中景をカットし庭と外部の山や湖・寺塔を背景として組み込む。ここに日本人の自然保全型開発手法の知恵が隠されている。人間は閉じ込められると外界と繋がりたいと願う。鎖国化の江戸期に借景庭園が流行したことは、その時代の庭園作庭にはこうした人間社会の関係のあり方が反映されたといえる。

樹藝：樹木を整枝剪定して抑制的に管理する必要。植物成長抑制技術により植物と人間のふれあい精神。環境を守るための植栽 = 防風・環境保全、修景のための植栽 = 紅葉・花木など。高密度の植栽 = 植栽の管理、剪定・整枝、大刈込、露地・茶庭、市中の山居など、庭木では松・槇・モッコクなど成長の遅い樹種を選定し、樹木に手入れを施す樹藝文化を発達させた。

然び(さび)：時間美・空間造形美演出技術。日本の庭園はとくにその時間美技術に特徴がある。変化景の美、歴史美尊重の精神。具体的には飛石の打ち方は歩行速度に見合った空間構成や空間を表し、園路の直曲と曲率、台地と低地の変化、山の端・月の出などはスケール、リズム、年月、新緑・深緑・黄紅葉・落葉、四季、根張り、大木・老木・巨木、苔むす、風化、然び、秒、分、時、朝夕、季、十・百・千年など時間的積層性を美とみる。造園も農業も「自然共生技術」そのものであった。

(4) 造園の思想と方法

「日本庭園」はこれからの環境計画のあり方を示唆する。

景観計画の考え方と進め方として社会のあり方全体を見通して構想することの必要性。以下に具体例(パワーポイントによるスライド)

- A) 河南湖：川溜池 用水 新田開発 学田(奨学田) 領民教育 地域振興・地域経営
- B) 旧浜離宮庭園：多機能 = 居住・鑑賞・静的レク・軍事・防災・環境保全・社交・外交・信仰・殖産・動的レクなどの間での調和
- C) 小石川後樂園・水戸偕楽園・養翠園の西湖堤 / 杭州の西湖十景から公共事業のプロセスを学ぶ。治水・交通・漁業・緑化・修景・詩画の題材など。

造園の方法：景観設計(ランドスケープ・デザイン)のあり方と納め方。土地条件を踏まえ機能と景観を調和させて設計する。

- A) 平安京の庭園の立地と構成 利水・方位・微気象改善など配慮
- B) 兼六園 - 宏大・幽邃、人力・蒼古、水泉・眺望を兼ねた景観構成
- C) 露地聴書 飛び石の打ち方は渡りと景気、用と景の調和があるデザイン

これからの公共事業のすすめ方

目指すは「美しい景観」「いい風景」= 自然+歴史+文化+経済 = アメニティ = 魅力+活力ある風景を見る目が、世界的観光地を創る。

具体例 中国・杭州西湖十景 西湖十景のできるまで

- A) 洪水対策 = 築堤
- B) 交通対策 = 兩岸を直結するバイパス
- C) 内水面漁業対策 = アーチ橋の架橋で舟運の確保
- D) 緑化対策 = 楊柳を列植
- E) 景観対策 = 造景・修景で詩題・画題の名所をつくる
- F) 景観建築として塔や院を景観ポイント
- G) 西湖十景 = 日本各地の名園・名所のモデルとなった(広島縮景園、福岡大濠公園など)。

地域づくりは日本の庭園の思想とデザインを必要とし、この景観作りの指針が各地に広がれば、景観の美しい「美し国」の日本が現れることであろう。

(文責：茂木 栄)

次回予告(第22回関東定例研究会)

日時：2005年10月14日(土) 14:00~17:00

場所：國學院大学・渋谷キャンパス 120周年記念1号館1205教室

(東京都渋谷区東4-10-28)

テーマ：「モリのまつり試論 - 奥三河古戸の一年の神事」

講師：茂木 栄(国学院大学助教授・社叢学会理事)

コメンタ：藺田 稔(京都大学名誉教授・社叢学会副理事長)

トップページの『向日明神篤狂言』の記事は当学会々員で京都府向日市在住の上田昌弘氏に執筆依頼したものです。上田氏は60歳を過ぎてから、地元の向日神社の荒廃した社叢を甦らせようと孤軍奮闘し、やがて「鎮守の森の会」を創設し、鎮守の森を市民の交流の場にしようと、社叢の保存と町づくりに取り組んでおられます。今回の催しもその一環で、この日の観客には竹製の杯を使った「かつぼ酒」やお茶がふるまわれ、茂山狂言会が演じる洒脱な芸に観客は酔いしれたそうです。

今月16日から19日までの4日間、京都・大阪・奈良の各神社を会場に「第2回社叢インストラクター(第2期)養成講座」が開催されますが、2008年には第1回社叢インストラクター認定試験を実施することが決まりました。詳細につきましては、認定試験実施概要を決定次第お知らせいたします。

今年は2年ぶりにおふらんすでおばかんす(ケツ!)。南の海岸(早い話が地中海ペリ、おセレブなニース・カンヌってあたりですな)にはメタボリック症候群なんて、何それってなウエスト1mを軽く超えているような老はもちろん、若いのも、男も女もそろって半裸でトドのように転がっている。

私のウエスト廻りも最近随分貫禄をつけてきたけれど、「す、すいません、ひ、貧弱で」ってなもんで、肩身が狭うございました。世にフレンチ・パラドクスというものがございまして、美食にワインがばがばの癖してみよ~に長生きする国民なんですな、フランス人というのは。

ま、あれだけ「自分が一番っ!!」って確信できるところが長生きの秘訣でしょうか。でも、自分は一番だけど、アンタが一番じゃない!とは思っていても言わない辺りが平和共存の秘訣かもしれません。

(藤岡 郁)

次回予告(第22回関西定例研究会)

日時 : 2006年9月30日(土) 13:30~15:30
 場所 : ビル・葆光6階 大道の間(京都市中京区室町御池西南角 075-211-4171)
 テーマ : 近江の式内社について
 講師 : 川北 靖之(京都産業大学教授)
 コメンター : 井上 満郎(社叢学会理事・京都産業大学教授)

原稿募集!

『社叢学研究』(第5号)への投稿:従来どおり論文、研究ノート、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)のほかに、会員通信「鎮守の森の活動報告」を募集します(下記参照)。今年度の投稿締切りは、いずれも11月30日(木)必着。

「鎮守の森の活動報告」:祭り、音楽会、問題点など。B5判1200字。横書き。手書き、ワープロ、イラスト、写真入り、いずれも可。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町西入雁金町373番地
 みよいビル303号 TEL075-212-2973 FAX 075-212-2916
 URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
 社叢学会関東支部 〒101-0031 千代田区東神田1-8-11 森波ビル2F
 TEL03-5875-8423 FAX 03-5875-8321 E-Mail shasou@macrovision.co.jp